

## 16歳の看護学生の広島被爆体験

# 被爆の記

福米 志津

昭和 20 年8月6日、私は広島に居ました。

日本赤十字社甲種看護婦養成所の生徒でした。入学して4ヶ月、満 16 才8ヶ月でした。

8月6日の朝、いつもの夏空は晴れて暑い一日の始まりでした。当時、授業も一時停止となり自習の日々となっていました。

食堂から戻り、机の前に座り同室の友人と今日の予定など話していましたが、右側の窓からの太陽の光がとても眩しいので、白いカーテンを閉めて再び机の前に来た時に大きな音と共に白い閃光、丁度写真を撮る時のフラッシュの 100 倍、いや 1000 倍と思える光が目も眩むばかりに見えたのです。窓いっぱいに拡がって見えました。その閃光は 60 余年後の今も目を瞑ると眼の中いっぱいに広がるのです。

それから何秒か、何分か、何 10 分か、失神していたのかも知れません。ふと気がつくとき真暗闇の中に居る、しかも体が動かない、生きているのか死んでいるのかもわからないまま少しずつ意識が戻って来ました。少しからだは動いた、その時、眼の向こうにうす明かりが見え、ああ私は押しつぶされているのだと認識しました。何故このような状態になっているのか考えることも出来ないが、とにかく何とかしてここから脱出しなくてはと、渾身の力を出して体を動かして少しずつ前進しているうち、赤い色が目に入り、あれは私の文庫だ、あの部屋で押しつぶされたのだと思いながら、やっとの思いで立ち上がることが出来ました。さっき迄居た部屋は跡形もなくただ瓦礫の上に立っていました。何故？ 考える間もなく、どこかで「助けて！！助けて！！」の音がきこえる。あれ？ さっき迄共に部屋に向い合って座っていた友の声。「どこにいるの？」「ここよ！！」みるとくずれた建物の間から手を出して「助けて！！」と叫んでいる。

足元の瓦礫の上を転びそうになりながら彼女の近くまで行き、思いつき手を引っぱって助け出しました。ふと胸元をみると、ブラウスの胸あたりが大きく血に染まって



いましたが、別に痛みも感じませんでした。

見渡す限り破壊されていて、さてどうしよう、どこへ逃げたらいいのか、あたり一面ひどい埃が立ち込めてどんよりしていました。先ず本館を目指して行こうと思い、そちらをめざして歩きはじめたものの、押しつぶされていたせいか、体中が痛くて歩けない状態でしたが、骨折等していなかったせいか、何とか歩を進めることができました。

うろろうろしている間に埃っぽい空気が少なくなり、まぶしい太陽が照り付けて来ました。顔や手がとても痛い。まさかやけどの痛みとは思いませんでした。本館の建物は近いと思うのに歩けない、やっと体が入る位の防空壕の様な蔭をみつけて体を横にする。顔や手がちりちりと痛むし、そのうち胸が悪くなり嘔吐してしまう、何回も何10回も、出るものがなくなっても息苦しく黄色い液が出てしまいました。すっかり力尽き果ててぐったりしてしまって、しばらく体を横にしていました。それが何時なのか、わかりません。

何とか本館前迄辿りつきましたが又ぐったりとして記憶がありません。ふと気付くと夕方、薄暗くなっていました。上級生、同級生もみな力無く座っておられました。みなぐったりとして話をする元気もありません。日が暮れてすっかり焼けた街の焼け残った電信柱のてっぺんがまだ燃えています、ちろちろと。電柱の炎、音の消えた街の何とも云えない臭い、それは死体の焼ける臭いだったのです。あちらこちら、助けを求める人の声。

やっと夜が明けた、立つのがやっとです。怪我人は来る様にと言われて病室に入る。顔の右側右手の火傷、手の甲は皮がはがれて赤身に血が滲む、左の指は動きが悪い、特に指二本は動かない。何よりも体がぐったりとして起き上がることが出来ませんでした。若しあの時窓のカーテンを引いていなかったなら……今のわたしは存在しなかったかもしれない。

翌日、鏡に写る自分の顔を見たときの驚き。額は紫色に腫れている、目の廻りも腫れて傷もあちこちあり血もにじむ、額右側は首筋迄赤く腫れている、髪の毛は灰をかぶった様な汚れ様、櫛を入れると一かたまりの髪の毛がぼろっと抜けた、砂埃と共に梳く度にぼろぼろと抜け落ちた、又体がぐったりとして起きられない。

やがて何とか動けるようになったので、十三日頃から病室勤務となりました。病室と云っても本館玄関のホールに、又階段のおどり場にと、横たわり斃れている人々、うめき声を上げている人々の看護でした。野戦病院さながら、でもここに居る人々は戦争に加わ



No. 7 日赤玄関階段 8.8  
必死の患者達を正面の大階段を  
最後へまで押し上げて、我れ死に  
爪をこけていた。

日赤玄関階段の負傷者  
画：内田豊  
所蔵：広島平和記念資料館

った方々ではない。床の上に直接、又は布団の上で血みどろの体を横たえている人々、親も見分けのつかない程のやけどの人々……

手術用のマスクを貸して下さった。二重、三重にしても防ぐことの出来ない異臭でした。入学4ヶ月の私達には上級生の言われる事をして働くだけです。主に火傷、体中、顔、腕、足、体、背中、とにかく頭から足の先迄です。手当と云っても火傷や傷に白い薬を塗って顔だったら目と

鼻と、口の場所を丸く切りとったガーゼが貼ってありました。ガーゼが乾くと皮膚が痛むので、水にガーゼを浸してぬらしたものをそっと当て、顔を覆ったガーゼを湿すのです。それを何人も何十人も。そのうち火傷が化膿して来て顔にまるく穴をあけたガーゼの中から蛆虫が動きだして目、鼻、口から何匹も何匹も出て来ます。

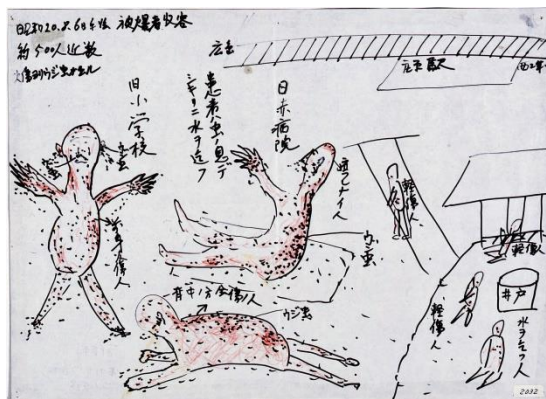
生きた人間の体に、蛆虫が蠢くとは。……とても衝撃でした。息をのみました。でも驚いては居られません。人々はただ横たわり体を動かすことも出来ないで力なく「看護婦さーん、カンゴフサンー」「いたいよー」「おかあさん」。皆苦しんで居られます。私にはピンセットで一匹一匹蛆虫をとって上げる事しか出来ません。蛆虫とは蠅の幼虫のことです。蠅が来ては膿のたまった皮膚に卵を生みつけるのです。

たった一発の原子爆弾で地上の悉くが破壊されて放射能を浴びてしまいました。この残酷さは全く非人道的以外の何ものでもありません。60幾数年経ても鏡をみるといやでも目に入る痕あとに、様々な思いに胸が痛みます。

戦争は絶対反対！！ 特に核兵器は反対！！  
世界の平和を願います。

若い日に詠んだ拙い短歌より（昭和35年頃）

問わるるまま被爆体験かたりおり こみ上ぐる怒り抑えかねつつ  
あの日あの時一瞬にして消えゆきし あまたの尊きいのちを思う  
息絶えし幼児をしかと抱きかかえ 狂乱の母のうつろな眼  
原爆をつくりし人等知りはずまい 地獄と化した広島を  
まざまざと凄惨の日浮かび来て 真夏陽のもと憤り湧く  
屍臭満つ暗き焼け野に母恋えり 誰ももの言わず夜の更けてゆく



火傷の傷跡からうじ虫がでて  
画：西村サトヨ  
所蔵：広島平和記念資料館